

ある年の夏、一書と出会った！

林 陽子（経営学部3年）

幼い頃は読書が好きで、様々な種類の本を読んでいました。しかし、中学生になると読書の時間が減り、高校生の時は、本の代わりに漫画や映画、新聞の代わりにテレビを見る生活でした。しかし大学生になり、入学式で初めて直に耳にした創立者のスピーチの『良書に触れなさい』という言葉に触れ、本を読もうと思いました。

思うことは簡単ですが、漫画を読む習慣やテレビを見る癖は簡単には抜けず、読書は一向に進みませんでした。そんな私に先輩が、「面白いよ！あまりに夢中になって1日で読んでしまった。」と、1冊の本を薦めてくれました。それは、庶民を大切にし、財政難や飢饉を乗り越え、後世に人材を残そうと学問に力を入れる一藩の名君を描いた、童門冬二著「小説上杉鷹山」でした。

疑いながらも本を開き読み始めると、鷹山の生き方、物事の捉え方に感動し、人間学を学んでいるような気持ちになりました。気付けば、とても熱中して時間が経つのも忘れ読み続けていました。読み終わったときの爽快感、達成感は今でも鮮明に憶えています。



この喜びが突破口となりました。私にも、飽きずに読みきれの本がある、違う本にも挑戦してみよう！と思いました。不思議とその1冊以降は、どの本も読みきることができるようになりました。特に夏休みなどの長期休みには、読書に挑戦するには最高の機会です。普段は分厚くて開こうともしないような本に挑戦し、寝るのも忘れて読んだ思い出もあります。なかでも、村上春樹著「世界の終わり」とハードボイルド・ワンダーランド」は1年生の夏休みに、暑さも忘れて、食べながら、歩きながら一日かけて読み続けました。逆に、薄い本を何種類も読んだ思い出もあります。

そのような経験を経ながら読書を通して感じることは、読書とはただ知識を得るだけではなく、自身との対話から新しい創造を生み出すということです。『読書が人間を「人間」にするのです。単なる技術屋であってはならない。どんな立場の指導者であれ、世界的な長編小説も読んでいないのでは、立派な指導者になれるわけがない』、『何読もうか迷っているひまに、一頁でも読んだほうがいい。時間がないと言い訳するより、5分でも10分でも努力を！』との創立者のスピーチの通り、読書の時間を造れない、読書が苦手、そういった思いに打ち勝って読書に挑戦するからこそ、読み終えたときの喜びは大きく、その喜びが次の本へと導いてくれるのだと今感じています。